

日蓮大聖人御書全集

さんさんぞうきょうのこと

三三蔵祈雨事

新版
1940
〜
1945

さんさんぞうきうのこと

三三蔵祈雨事

けんじがんねん がつ にち さい にしやまどの

建治元年('75) 6月22日 54歳 西山殿

そ き 植 そうろう おおかせ吹 そうら 強 助

夫れ、木をうえ候には、大風ふき候えども、つよきすけ

支 倒 本より生いて候 木なれども、根の

をかいぬればたおれず。よわ 倒 かい もの せい 倒 弱きはたおれぬ。甲斐なき者なれども、たすくる者強けれ

ばたおれず。すこし健げの者も、ひとりなれば悪しきみちに

はたおれぬ。さんぜんだいせんせかい しやりほつ かしようそんじや 除

また、三千大千世界のなかには、舍利弗・迦葉尊者をのぞ

いては、仏よにいで給わずば、一人もなく三悪道に墮つべ

ほとけ世 出 たま ひひとり さんあくどう お

はたおれぬ。

また、三千大千世界のなかには、舍利弗・迦葉尊者をのぞ

いては、仏よにいで給わずば、一人もなく三悪道に墮つべ

ほとけ世 出 たま ひひとり さんあくどう お

はたおれぬ。

ほとけ 侍

ごうえん

いつさいしゆじよう

かりしが、仏をたのみまいらせし強縁によりて、一切衆生

多 ほとけ 成

あじゃせおう 鶯 掘 魔 羅

はおおく仏になりしなり。まして阿闍世王・おうくつまら

もう あくにん

叶

かなら

なんど申せし悪人どもは、いかにもかなうまじくて、必ず

あびじごく

お

きようしゆしゃくそん

もう

だいにん

阿鼻地獄に墮つべかりしかども、教主釈尊と申す大人に

行 合 たま

ほとけ

成

たま

ゆきあわせ給いてこそ仏にはならせ給いしか。

ほとけ

道

ぜんちしき

過

我 智慧

されば、仏になるみちは善知識にはすぎず。わがちえ

何

熱

冷

ちえ

なににかせん。ただあつき・つめたきばかりの智慧だにも

そろう

ぜんちしき

大

切

候ならば、善知識たいせちなり。

ぜんちしき

あ

だいいち

難

しかるに、善知識に値うことが第一のかたきことなり。

ほとけ ぜんちしき あ

いちげん

亀

うぎ

されば、仏は善知識に値うことをば、一眼のかめの浮き木

い ぼんてん 糸 くだ だいち 針 目 い

に入り、梵天よりいとを下して大地のはりのめに入るに

譬 たと まっだいあくせ あくちしき だいちみじん

たとえ給えり。しかるに、末代悪世には悪知識は大地微塵よ

多 ぜんちしき そうじよう ど 少

りもおおく、善知識は爪上の土よりもすくなし。

ふだらくせん かんぜおんぼさつ ぜんざいどうじ ぜんちしき べつ えんにきよう

補陀落山の觀世音菩薩は善財童子の善知識、別・円二教を

教 じゆんえん じようたいぼさつ み 売 ぜん

おしえて、いまだ純円ならず。常啼菩薩は身をうつて善

ちしき 求 どんむかつぼさつ 値 つう べつ えん さんぎよう

知識をもとめしに、曇無竭菩薩にあえり。通・別・円の三教

習 ほけきよう 教 しゃりほつ こんし ぜんちしき

をならいて、法華経をおしえず。舍利弗は金師が善知識、

くじゆうにち もう せんだい ひと 富楼那 いちげ

九十日と申せしかば、闍提の人となしたりき。ふるなは一夏

せつぼう

だいじよう

き

しようにん

だいしよう

ほけきよう

許

の説法に大乘の機を小人となす。大聖すら法華経をゆる

しょうか

羅漢

き

知

まつだいあくせ

かくしやとう

されず。証果のらかな、機をしらず。末代悪世の学者等を

推

てんち

ひがしにし

ば、これをもつてすいしぬべし。天を地といい、東を西と

ひみず

ほしつき

勝

蟻塚

いい、火を水とおしえ、星は月にすぐれたり、ありづかは

しゆみせん

超

もう

ひとびと

しん

そうら

ひとびと

須弥山にこえたりなんと申す人々を信じて候わん人々は、

習

あくにん

遥

劣

悪

ならわざらん悪人にははるかおとりてあしかりぬべし。

にちれん

ぶつぼう

試

どうり

しょうもん

過

日蓮、仏法をこころみるに、道理と証文にはすぎず。

どうり

しょうもん

げんしよう

過

い

また道理・証文よりも現証にはすぎず。しかるに、去ぬ

ぶんえいごねん

ころ

ひがし

ふしゆ起

にし

もうこ

責

る文永五年の比、東には俘囚おこり、西には蒙古よりせめ

使 着

にちれんあん

い

ぶつぼう

しん

つかいつきぬ。日蓮案じて云わく、仏法を信ぜざればなり。

さだ

じょうぶく

行

じょうぶく

しんごんしゅう

定めて調伏おこなわれんずらん。調伏はまた真言宗にて

がっし

かんど

にほん

さんかこく

あいだ

ぞあらんずらん。月支・漢土・日本、三箇国の間に、しば

がっし

かんど

にほん

にこく

しんごんしゅう

破

らく月支はおく、漢土・日本の二国は真言宗にやぶらるべ

し。

ぜんむいさんぞう

かんど

わた

とき

とう

げんそう

とき

善無畏三蔵、漢土に亘つてありし時は、唐の玄宗の時な

だいかんぼつ

きう

ほう

仰

付

そうら

り。大旱魃ありしに、祈雨の法をおおせつけられて候いし

おおあめ

かみいちにん

しもばんみん

おお

よろこ

に、大雨ふらせて上一人より下万民にいたるまで大いに悦

しゆゆ

おおかせふ

きた

こくど

吹

破

びしほどに、須臾ありて大風吹き来つて国土をふきやぶり

しかば、きようさめてありしなり。またその世に金剛智三蔵

あめ おん 祈

しちにち うち おおあめふ

わたる。また雨の御いのりありしかば、七日が内に大雨下る。

かみ よろこ

ぜんだいみもん おおかせふ

上のごとく悦んでありしほどに、前代未聞の大風吹きしか

しんごんしゅう

恐

あくほう

がっし

追

ば、「真言宗はおそろしき悪法なり」とて月支へおわれし

留

おな

みよ

ふくうさんぞう

が、とこうしてとどまりぬ。また同じき御世に、不空三蔵、

あめ 祈

みっか

うち

おおあめふ

よろこ

前

雨をいのりしほどに三日が内に大雨下る。悦びさきのごと

おおかせふ

にど

夥

すうじゆうにち

し。また大風吹いて、さき二度よりもおびただし。数十日

止

ふかしぎ

にほんこく

とどまらず。不可思議のことにてありしなり。これは日本国

ちしや

ぐしやいちにん

知

知

の智者・愚者一人もしらぬことなり。しらんとおもわば、

にちれん い

とき

詳

尋

習

日蓮が生きてある時、くわしくたずねならえ。

にほんこく

てんちようがんねんにがっだいかんぼつ

こうぼうだいし

しんせん

日本国には、天長元年二月大旱魃あり。弘法大師を神泉

えん

きう

しゅびん

もう

ひと

苑にして祈雨あるべきにてありしほどに、守敏と申せし人、

進

い

こうぼう

げろう

われ

じようろう

仰

すすんで云わく「弘法は下臈なり。我は上臈なり。まずおお

被

もう

請

したが

しゅびん

行

しちにち

せをかぼるべし」と申す。こうに随つて守敏おこなう。七日

もう

おおあめふ

きようじゆう

いなか

と申すには大雨下る。しかれども、京中ばかりにて田舎に

こうぼう

仰

付

しちにち

ふらず。弘法におおせつけられてありしかば、七日にふら

にしちにち

さんしちにち

てんし

われ

ず、二七日にふらず、三七日にふらざりしかば、天子、我と

祈

あめ

たま

とうじ

もんじんとう

わ

いのりて雨をふらせ給いき。しかるを、東寺の門人等、我が

し 師の雨とごうす。くわしくは日記をひいて習うべし。天下

あめ 号 詳 につき 引 なら せんか

だいいち 誑 惑 ほか こうにんくねん たる

第一のわわくのあるなり。これより外に弘仁九年の春の

疫 癘 さんこ投 ふかしぎ おうわく

えきれい、また三鉗なげたることに、不可思議の誑惑あり。

くでん

口伝すべし。

てんだいだいし ちん よ だいかんぼつ ほけきよう 誑 しゆゆ

天台大師は、陳の世に大旱魃あり、法華経をよみて須臾に

あめふ おうしん 頭 傾 ばんみん 掌 合

雨下らす。王臣こうべをかたぶけ、万民たなごころをあわ

おおあめ かぜ 吹 かんう

せたり。しかも大雨にもあらず、風もふかず、甘雨にてあ

ちんおう だいし みまえ だいいり 帰

りしかば、陳王、大師の御前におわしまして、内裏へかえら

忘 たま とき さんど らいはい

んことをわすれ給いき。この時、三度の礼拝はありしなり。

い こうにんくねん はる だいかんぼつ さが てんのう まつな
去ぬる弘仁九年の春、大旱魃ありき。嵯峨の天皇、真綱と

もう しんか ふゆつぐ 執 もう ほけきよう

申す臣下をもつて冬嗣のとり申されしかば、法華経・

こんこうみようきよう にんのうきよう でんぎようだいしきう みつか

金光明経・仁王経をもつて伝教大師祈雨ありき。三日と

もう ひ 細 雲 あめ 静 々 ふ

申せし日、ほそきくも・ほそき雨しずしずと下りしかば、

てんし 喜 たま にほんだいいち 難 事

天子あまりによるこばせ給いて、日本第一のかたことたり

だいじようかいだん 許 でんぎようだいし おんし ごみよう もう

し大乘戒壇はゆるされしなり。伝教大師の御師・護命と申

しようにん なんとだいいち そう しじゆうにん みでし 相 具

せし聖人は、南都第一の僧なり。四十人の御弟子あいぐし

にんのうきよう きう いつか もう あめふ

て、仁王経をもつて祈雨ありしが、五日と申せしに雨下り

いつか 劣

ぬ。五日はいみじきことなれども、三日にはおとりて、し

あめ 荒

かも雨あらかりしかば、まけにならせ給いぬ。これをもつ

負

たま

こうぼう

あめ

推

たも

て弘法の雨をばすいせさせ給うべし。

ほけきよう

しんごん

疎

そうろう

にほん

かく法華経はめでたく真言はおろかに候に、日本の

亡

いっこうしんごん

おきのほうおう

ほろぶべきにや、一向真言にてあるなり。隠岐法皇のこと

思

しんごん

もうこ

蝦夷

をもつておもうに、真言をもつて蒙古とえぞとを

調 伏

にほんこく

負

推

じようぶくせば日本国やまけんずらんとすいせしゆえに、

命

捨

言

思

言

このこと、いのちをすてていいてみるとおもいしなり。いい

とき

弟子

制

今

合

こころ

し時は、でしらせいせしかども、いまはあいぬれば、心よ

かんど

にほん

ちしや

ごひやくよねん

あいだいちにん

知

かるべきにや。漢土・日本の智者、五百余年が間一人もし

勘 そろうろう
らぬことをかんがえて候なり。

ぜんむい こんごうち ふくうとう きう あめ ふ

善無畏・金剛智・不空等の祈雨に、雨は下つて、しかも大風 おおかせ

添 そろうろう

こころ得

たも

げどう ほう

のそい候は、いかに心えさせ給うべき。外道の法なれ

言

どうし

ほう

あめふ

ども、いうにかいなき道士の法にも雨下ることあり。まし

ぶつぼう

しょうじよう

ほう

おこな

て仏法は、小乗なりとも、法のごとく行うならば、いか

あめふ

況

だいにちきよう

げごん

ほんにや

でか雨下らざるべき。いおうや、大日経は、華嚴・般若に

及

あごん

勝

そろうろう

こそおよばねども、阿舎にはすこしまさりて候ぞかし。

祈

あめふ

あめ ふ

いかでかいのらんに雨下らざるべき。されば、雨は下つて

そうら

おおかせ

添

おお

ひがごと

彼

ほう

なか

候えども大風のそいぬるは、大いなる僻事のかの法の中に

まじわれるなるべし。弘法大師の、三七日に雨下らずして

そうろう

てんし

あめ

わ

あめ

もう

ぜんむいとう

おほ

候を、天子の雨を我が雨と申すは、また善無畏等よりも大

勝

とが

いにまさる矢のあるなり。

だいいち

だいもうご

こうぼうだいし

じひつ

い

こうにんくねん

第一の大妄語には、弘法大師の自筆に云わく「弘仁九年の

はる

えき

癘

祈

よなか

ひ出

春、疫れいをいのりてありしかば、夜中に日いでたり」と

うんぬん

虚

事

言

ひと

にちれん

もんけ

云々。かかるそらごとをいう人なり。このことは日蓮が門家

だいいち

ひじ

ほんもん

取

詰

ぶつぼう

第一の秘事なり。本文をとり、つめていうべし。仏法はさ

かみ

書

てんかだいいち

だいいち

伝

ておきぬ、上にかきぬること、天下第一の大事なり。つて

仰

おんこころ

至

そつち

におおせあるべからず。御心ざしのいたりて候えば、

驚

おどろかしまいらせ候。

そろうろう

にちれん

日蓮をば、「いかんがあるべかるらんとおぼつかなし」と

覚 束

思

おぼしめすべきゆえに、かかる事ども候。むこり国だに

こと

そろうろう

蒙 古 こく

強

責

そろうら

こんじよう

広

そろうら

もつよくせめ候わば、今生にもひろまることも候いなん。

激

当

ひとびと

悔

辺

あまりにはげしくあたりし人々は、くゆるへんもやあらん

ずらん。

げどう

もう

ぶつぜんはつびやくねん

始

初

外道と申すは、仏前八百年よりはじまりて、はじめは

にてんさんせん

漸

分

くじゆうごしめ

二天三仙にてありしが、ようやくわかれて九十五種なり。

なか

おお

ちしや

じんずう

者

いちにん

しょうじ

その中に多くの智者、神通のものありしかども、一人も生死

離

きえ

ひとびと

ぜん

あく

みな

をはなれず。また帰依せし人々も、善につけ悪につけて、皆

さんあくどう

お

そうち

ほとけしゆつせ

たま

三悪道に堕ち候いしを、仏出世せさせ給いてありしかば、

くじゆうごしゆ

げどう

じゆうろくだいこく

おうしん

しよみん

語

九十五種の外道、十六大国の王臣・諸民をかたらいて、あ

罵

打

でし

檀

那 とう

るいはのり、あるいはうち、あるいは弟子あるいはだんな等、

むりようむへん

殺

ほとけ

弛

こころ

われ

ほうもん

無量無辺ころせしかども、仏たゆむ心なし。「我この法門

しよにん

脅

言

止

いつさいしゆじようじこく

を諸人におどされていいやむほどならば、一切衆生地獄に

お

強

歎

たま

たい

こころ

堕つべし」とつよくなげかせ給いしゆえに、退する心なし。

げどう

もう

せんぶつ

きようぎよう

み

読

損

この外道と申すは、先仏の経々を見て、よみそこないて

そうち

こと 起

候いしより事おこれり。

いま

にほん ほうもんおお

みなもと

今もまたかくのごとし。日本の法門多しといえども、源

はっしゅう くしゅう じっしゅう

起

じっしゅう

げごん

は、八宗・九宗・十宗よりおこれり。十宗のなかに華嚴

とう しゅうじゅう

しんごん

てんだい

しやうれつ

こうぼう

じ

等の宗々はさておきぬ、真言と天台との勝劣に弘法・慈

かく ちしやう

惑

にほんこく

ひとびと

こんじやう

たこく

覚・智証のまどいしによりて、日本国の人々、今生は他国

責

ごしやう

あくどう

お

かんど

亡

にもせめられ、後生にも悪道に墮つるなり。漢土のほろび、

あくどう

お

ぜんむい

こんぐち

ふくう

誤

また悪道に墮つることも、善無畏・金剛智・不空のあやまり

始

てんだいしゅう

ひとびと

じかく

ちしやう

のち

よりはじまれり。また天台宗の人々も、慈覚・智証より後

ひとびと

ちえ

塞

てんだいしゅう

は、かの人々の智慧にせかれて天台宗のごとくならず。さ

況

にちれん

彼

過

れば、「さのみやはあるべき。いおうや日蓮はかれにすぐべ

我 でしとう 思

ほとけ きもん

違

き」とはわが弟子等おぼせども、 仏の記文にはたがわず。

まつぼう い

ぶつぼう

謗

むけんじごく

お

者

「末法に入つて、 仏法をぼうじて無間地獄に墮つべきもの

だいちみじん

おお

しょうほう

得

ひと

そうじょう

ど

は大地微塵よりも多く、 正法をえたらん人は爪上の土よ

少

ねはんぎょう

説

ほけきょう

りもすくなし」と涅槃経にはとかれ、 法華経には「たとい

しゆみせん

投

者

わ

まつぼう

ほけきょう

きょう

須弥山をなぐるものはありとも、 我が末法に法華経を経の

説

もの有

難

しる

置

たま

ごとくにとく者ありがたし」と記しおかせ給えり。

だいじつきょう

こんこうみょうきょう

にんのうきょう

しゆぎきょう

般

泥

洹

きょう

大集経・金光明経・仁王経・守護経・はちないおん経・

さいしやうおうきやうとう

まつぼう

い

しょうほう

ぎょう

ひとしゆつたい

最勝王経等に、「末法に入つて正法を行ぜん人出来せ

じゃほう

者

おうしんとう

訴

か

おう

ば、邪法のもの、王臣等にうつたえてあらんほどに、彼の王

しんとう

たにん

言葉

付

いちにん

しょうほう

者

臣等、他人がことばについて、一人の正法のを、ある

罵

責

流

殺

いはのり、あるいはせめ、あるいはながし、あるいはころさ

ぼんのう

たいしゃく

むりよう

しよてん

てんじん

ちじんとう

隣

国

ば、梵王・帝釈・無量の諸天・天神・地神等、りんごくの

けんおう

み

い

替

くに

亡

しる

たま

賢王の身に入りかわって、その国をほろぼすべし」と記し給

いま

よ

に

そうろう

えり。今の世は似て候ものかな。

おのおの

しゆくぜん

にちれん

とぶら

たま

そもそも、各々はいかなる宿善にて日蓮をば訪わせ給

よ

よ

かこ

おんたず

な

えるぞ。能く能く過去を御尋ねあらば、なにと無くとも、

たびしようじ

はな

たも

須

利

槃

特

さんかねん

この度生死は離れさせ給うべし。すりはんどくは、三箇年に

じゆうしじ

そら

ほとけ

な

だいは

ろくまんぞう

十四字を暗にせざりしかども、仏に成りぬ。提婆は、六万蔵

を暗にして無間に墮ちぬ。これひとえに末代の今の世を表

するなり。あえて人の上と思しめすべからず。事繁ければ、

止め置き候い畢わんぬ。

そもそも、当時の恩々に、御志申すばかり候わねば、

大事のこと、あらあらおどろかしまいらせ候。

ささげ・青大豆、給び候いぬ。

六月二十二日

日蓮 花押

西山殿御返事

そら むけん お まっだい いま よ ひよう

ひと うえ おぼ ことしげ

とど お そうら お

とうじ そうそう おんこころやしもう そうら

だいじ 粗々 驚 そうろう

大角豆 あおだいず た そうら

ろくがつにじゆうにち にちれん かおう

にしやまどのごへんじ